

(自閉児) 言語発達遅滞児の発達診断方式

——その言語治療に就ての考察

片桐 格

社会福祉法人 グリーンローズ

目的：最近10年間、自閉症に就て、分裂症に係る幼児型とか、心因性、と言われてきた原因論は大きく変換して、現在は発達障害(developmental disorder)の一種に位置付けられるようになってきた。

現在、その自閉症研究の主流にあると言われるM.ラター達の、言語、認知、主因説の中でも、従来の自閉症研究の中で、中心的問題とされた、対人関係の障害形成に就て、それが二次的に発生されたか、主因とされる言語、認知、と相互関係の形成をするか原則として、従来の精神病に係る自閉症に一線を劃して、発達障害と言う観点から自閉児(autistic child)として、それを発達の問題と考えるべき。

又一方、言語臨床の立場から、従来、言語発達遅滞(developmental speech disorder syndrome)の範疇から除外して来た自閉症の問題を、改めて発達障害児——自閉児と言う観念に立つて、その遅滞の形成過程を、幼児期の初期の段階から考察を試み、更に、対人関係との係り方の発達の考察をこてきた。

上述の両者の観点から、2才前右の比較的早期に、家庭で気付く始語の遅れ、語彙獲得の遅れや、又その異質の問題を、早期に診断し、これを早期に適切に処遇する為の治療方式を、確立するのが、本研究の主たる目的である。

方法：演者は、昭和42年以来、私立幼稚園に併設した「ことば」の教室を中心に、心身障害幼児の言語臨床に係つてきたが、その後、昭和45年頃から自閉症の問題が、深刻な、分裂症の問題として社会の話題になるにつれて、2才、3才前右の早期に、言語発達の遅れを主訴として相談に来園する例が尋い、この対象児のようない閉児がその大半を占めている。

それは、2才前右の段階では、「ことば」の困難以外に、まだ幼児であること、その行動的特徴等に就ても、別に問題を意識しないままに、医師に相談しても、聴力検査が異常をすれば、心

心配ないと言われたり、たまたま聴力を調べて、異常値が見られなければ、3才過ぎないで分らないと言われ勝ちで、多うた子ども達であった。

当施設では、相談の時点で、従来、津守、橋本武、戸田、津守、磯部式を用いて、その履歴紙によつて、発達輪郭表を作り、その生後年令に比較して、言語発達面に於ける理解、表出の遅れは勿論であるが、身体的には、年令並と考へてきた父兄に、先ず、探索、操作と言つた年令のもの、運動感覚的遅れ、対人関係の相互関係を示す社会性の、その探索操作と同様に異常に遅れて1才代と言つた特徴を通して、その自閉児としての発達の特徴を示すことができるようにした。

この発達検査と共に、生後聴取を、詳細にするが、特に上記の発達診断検査に現れた、運動、探索操作面の運動感覚的発達の不統合的形成に關すること、又、対人関係に係る社会性、即ち情動発達に就て又言語に就ても、初期喃語期からの、状況に關して、聴取する。その何れの場面に就ても、生後、数ヶ月から、又1年以内の發生期にかけて、更に2才頃迄の間を、聴取して、これらの情報も、上記乳幼児精神発達診断に於ける発達検査表の中に入れて考察する手掛りとした。

又更に、最初の受け入れ時々の発達診断の輪郭表に續けて、それ以後の発達状況を大体、3ヶ月毎に、チェックして、通園指導以後の環境刺激が発達に及ぼした影響の有無を、その都度輪郭表に表して、考察、診断の手掛りとしてきた。

以上、乳幼児精神発達診断法を基本にした発達診断方式の概要である。

結果、および考察

1). 自閉児の発達診断。上記のように、乳幼児精神発達診断の履歴紙から、その輪郭表の上へ、正然と2才代から3才代の幼児の社会性(対人関係)が、1才代と、表れ、又探索、操作面も同様であることから、感覚器官の相互的発達形成の未熟さ、又言語面の理解、表出の遅滞を通して、容易に、自閉児の判別診断が可能になった。

然しこれは、この数年来、自閉症が、発達障害

と位置付けられるようになって、私も、M. ラター達によつて、「何らかの器質的障害に基づく、言語、認知、障害によるもの……」と言う、言語認知主因説が、次第に主流的見解になつてきた現在で、始めて言えたものと思ふ。然しこうした自閉児に共通したスズ代に似て、乳幼児精神発達診断法による輪郭表を通し表れる特徴は、その解説書津所、箱々式乳幼児精神発達診断法(0歳-3才)(P-157、オ4図・K、T、児)に紹介されている、自閉性精神の発達輪郭パターンを通じて示され、自閉児の判別に役立ててきた。

従来、この種の自閉児は、精神の一型とされてきたが、その検査診断が、スズ代の早期になされることにより、治療教育的接近が可能になりその後の発達経過に影響を与える可能性のあること、即ちそのうちあるものは、殆ど普通児に発達を遂げてゆくもの、又、その程度の個人差はあるが、次第に回復してゆく例を確認して来た。それは、受け入れ時の発達診断の輪郭表に、その後の治療教育の経過に従つて、3ヶ月間隔に輪郭表を書き加えて、その変化の様子を観察してきた結果と云える。又一方、その社会性(人間関係)、言語ともに、そうした輪郭表の積み重ねを通して、変化に難い例も又、確かに就学期には知的な遅れとなつて、言語的発達の遅れの問題が指摘されるが、それでも、なお、内面的理解力が形成され、対人関係が次第に改善され、所謂自閉性が、次第に消去され、言語発達の遅れのみが、指導の対象となつてくる。

2). 生育歴に見られる初期発達の特徴の考察。

①. 発達段階表に於ける受動的段階に見られる自閉児の共通な特徴。

1. 情動面に於て；①余り泣かない子どもだった。②逆に余り泣くので、母親は背中におおい抱したて過ぎた。
ロ. 運動、探索操作に於て；①おとなしくて手が掛らない子どもだった。②よく眠っていた。
ハ. 社会(対人関係)に於て；①母親があやしても笑わなかった。
ニ. 言語の面に於て；①余り泣かない子どもだった。②赤ちゃんと「おかたり」が聞かれなかった。③始め少し、「おかたり」があったが、その後消えなななで終わった。

②. 受動的段階から活発な段階へ進む後期に見られる共通な特徴。

1. 情動面に於て；①あやしても、余り笑わななな子どもだった。②余り人見知りをしたかった。
③始めによく泣いた子どもに於ては、次第に泣くのは減つてきたが、聴覚、視覚的刺激が過敏的になつた。何かヒカるもの、時計の歯車の音等、ロ. 運動、探索操作に於て；①腹面を床面につけたでり這いを殆どしないで、椅子立ちをした。直ぐ歩き始めた。②その代り奇妙なズリ這いをした。例えば、尻部でズリたり、背中や、後頭部と尻部で。又腹部を下にして、ズリたが手や膝を使わずに、腕の肘を使つてした。③歩行も、誕生前にしたが、歩き方が奇妙で、つま先で「忍び足」のような歩き方をした。又躊躇するように不安定な歩き方をした。

ハ. 社会(対人関係)に於て；①人見知りをしなかった。②、他家の人が抱くと、視線を合せずに顔をよこに向けた。③、母親の存在を意識しない。④一人遊びが早い。

ニ. 言語理解、発出面に於て；①喃語も低調ななな始語も不明のななでいる。②言語模倣もしない。③、1才過ぎて、2、3語連は言ひだが、その後言ひなくなつた。④その後次第に奇声を出して、パニックを起すようになった。

3). 自閉児の初期発達期の特徴と輪郭図に表れた現況と発達因果関係の考察。

①. 前項で述べた初期発達期に於ける、受動的反応の段階に於ける、情動、運動、社会、言語の各領域に於ける、その最初発達の低調な状態は、確かに、内発的感覚発達の分化の遅れを示している。これは、子ども自身の周囲に対する漠然とした身体感覚の発生を遅らせていると考える。又同時に情動の発達も遅らせている。

②. 上記の受動的反応の遅れが、以後の発達の段階としての幼児自身の身体で、自分の周囲に対する働きかけを低調にして、感覚的発達の未熟と表象能力発生を妨げる過渡的状況を招く。

結論；M. ラター達の言う、何らかの器質的障害に基づいて、前項①に述べたような内発的感覚発達の分化を遅らせ、又一方に、身体感覚の発生を遅らせ、自他の判別の不明確な、自閉的状態の始めの原因となつていていると考える。言語発達の遅滞も、即ち理解力の発達の前提としての感覚的イメージの発達が、前項②で述べたように遅れて、言語発達過渡的個人差が、この遅滞の発達仕方によって生じてくるものと考える。